

故古坂紘一先生を偲ぶ

古坂紘一先生が去る十月二十九日（木）午前八時三十分御逝去されました。葬儀は三十一日（土）に家族葬によってしめやかに行われました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

古坂先生は、昭和十五年兵庫県生まれ、昭和四十一年東北大学文学部を卒業、同大学院文学研究科博士課程単位取得退学（仏教史）、長年大阪教育大学に奉職されました。

大阪教育大学名誉教授、インド文化センター名誉所長。

著書「瑜伽師地論—随法・究竟・次第瑜伽處—」（共著・法蔵館）、「宗教史地図仏教」（朱鷺書房）他。

インド文化センター（アジア協会アジア友の会内）において、古坂先生は第二代所長（1999～2003年）として活躍されました。私も会の担当理事として運営に関わっていました。私は驚いたことがあります。学問的な質問をすると、「ボクは何も解っていないのです」と答えられました。私はこんな正直な学者に初めて会いました。分からなくても、一応答えるのが学者根性だと思っていたからです。私は学者としてだけではなく、人間として信頼にたる方だと直感的に思いました。

今だから正直に言いますが、当初、正統派学者に運営ができるだろうか、という危惧の念が、事務局サイドにありました。運営資金がない。つまり経営の才がなければならなかったのです。しばらくして、それが杞憂の念だということが分かったのです。

まず、古坂所長が意図したのは民主的な運営方法でした。男性三名（神崎靖和、永井三千彦、大麻豊）、女性三名（上原美津代、並川昌子、青木美千代）を加えた七名の実行委員会を立ち上げたのです。女性加わることによって、視界も広くなりました。

朴訥な人柄であったので、人付き合いが不得手な方かと思われたのですが、実に広範な人脈を持っておられ、インド文化センターは毎月の開催でしたが、3カ月先までの講師を決めることができました。その結果、わずかな謝金ではお招きできない優れた講師陣を招聘できるようになりました。

活動内容も多岐にわたりました。その一つの郊外セミナーを紹介します。

1999年10月14日（鶴林寺） 講師：吉田亨盛氏（鶴林寺真光院住職）

2000年10月14日（高野山） 講師：藤田光寛氏（高野山大学学長）

2002年10月13日（比叡山） 講師：星宮智光氏（叡山学院教授）

毎月の例会（講演会）以外に、特記すべきは、2002年9月南インド（バンガロール、チェンナイ）で日印国交樹立五十周年記念海外セミナーを催したことです。

講師：サウイトリ・ウィシュワナタン氏（元デリー大学教授）

講師：瀬田敦子氏（ピアノ奏者・武庫川女子大学非常勤講師）

講師：吉田清史氏（和太鼓奏者、造園業者）

講師：袋井由布子氏（和光大学非常勤講師）

講師：マシュー・ヴァルギース博士（中村元東方研究所研究員）

講師：山下博司氏（東北大学教授）

海外セミナー記念誌（和英文「日印文化交流よりの発信」）も、古坂先生が監修され、私が編集人になり発行しました。先生の論文は「日本における伝統的仏教の復活について」でした。山下博司先生には「日本・インド映画交流 50 年史をかえりみて」を寄稿いただき、袋井由布子先生の論文に掲載する図版が抜けていたという苦いミスも、先生と共有できたことは今となれば懐かしい思い出です。記念誌は、東北大学の先輩山折哲雄先生（国際日本文化研究センター名誉教授）にも贈呈致しました。

国内事業としては、2002 年 11 月 9 日、日印国交樹立五十周年記念公演を大規模に催しました。高名なインド舞踊家 C.V. チャンドラシェーカー師（元バローダ大学教授）舞踊団を招聘しました。共演者は福田麻紀氏等のチャトランガ、邦楽の大倉佐和子氏アンサンブルでした。

退任のときに、「ぼくの人生の中で一番輝いていた」とぼそつと言われました。そのことばで私も嬉しくなりました。今日までプルニマ会を通じて親しくお付き合いが続きました。

高野山における最後の講演（ヨーガ情報ステーション主催、2014 年 6 月 21 日）では、歩行が不自由になった先生を永井さんと私が抱えて登壇していただいたことも懐かしい思い出です。

古坂先生が検査入院をされたという知らせが上原さんと永井さんからありました。早速お見舞いに近くの大手前病院に出かけていきました。私は単純に、治療入院ではないのでよかったと思ったのです。丁度「意識の形而上学—『大乘起信論』の哲学」井筒俊彦著を読んでいて、古坂先生の見解を聞いたかったです。私の願いを受け入れ、先生は自宅にある同本を取り寄せて病床で読まれたそうです。

「大乘起信論」は学生時代に学んだ理論書です。さらに学びたいと思い、先生に勉強会を提言したことがあったのですが実現しませんでした。

二十三日の夜、いっぱい質問を考えて病院を再訪しました。ところが眠そうにしておられたので、質問はせずに世間話をして帰りました。二十七日に退院すると聞いたので、後日でよいと判断したのです。ところが、三十日に永井さんから急逝の連絡が入りました。永井さんは東大寺勸学院で先生の「金光明最勝王経」の講義を受けていました。連絡は東大寺から入りました。

臨終の間際に奥様が「東大寺が待っているよ！」と声をかけると、先生の顔が一瞬引き締まったとのこと。煉瓦を一つ一つ積むように知識理論を構築してきた先生ならではの最期です。

私の主たる質問は、「動かないもの」から、どうして「動くもの」が生じるのかというものでした。先生は何と答えられたでしょうか。

先生は動かないもの、絶対の世界（空性）に突入されてしまいました。

出棺の折、奥様が声をかけられました。「おとうさん、待っててね」

私もそれにならって述べます。「先生、待っていて下さい」と。今度お会いしたときに、先生の御見解をお聞きしたいものです。

古坂先生が培ってくださった御縁が、先生が逝かれた後も続いていきます。